

今日も世界で喜劇は続く…



誰かが私を差別する
私が誰かを差別する

配信スケジュール			
2021年	↓収録日/配信時間→	正午	18:00
16日(火)	1日目	★	☆
17日(水)	2日目	★	☆

21日(日) 午前0時まで 無料配信!

演出 上江洲朝男

調教師ふうな男

末吉功治★

島袋寛之☆

陳列された男

津波信一☆☆

陳列された女

上門みぎ★

棚原奏☆☆

作 知念正真

喜劇

人類館



jinruikan.com



喜劇「人類館」



@jinruikan



jinruikan_kigeki

チケット予約・お問合せ(AKNプロジェクト) Mail:aknp173@gmail.com. TEL:090-6863-9564

令和2年度沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業「沖縄の戯曲作品の活用を通して、沖縄の歴史的社会的課題に向き合い、モヤモヤと考える波を起こすきっかけ作り事業」
主催：AKNプロジェクト 後援：西原町、西原町教育委員会 支援：沖縄県、公益財団法人沖縄県文化振興会

主催者あいさつ

制作・総指揮 知念あかね

なぜ今、人類館を公演するんですか？いくつかの取材を受けた際、必ず聞かれた質問です。私としては「今になってしまった」と言うのが正直な思いです。8年前に父が亡くなった際「お父さんの作品は、あなたが残していかなくちゃ」とおっしゃった方がいらっしゃいました。父は演劇集団創造の団員であり、父の作品は創造の為に書かれたものが殆どです。それは、他の劇団さんが演じるには敷居を高くしている事を物語っていました。父の作品を大切に育ててきた創造は演出家の幸喜先生はじめ、団員の高齢化が顕著となり、今後の活動方法を悩んでおられました。その時「あなた、何か書いてみたら？書きなさいよ。」「いつかあなたが人類館をやるかもしれないから」と、熱心に芝居の話してくれたのは創造の女性団員、長田みちこさんでした。父の作品が埋もれてしまうことを一番に懸念していた彼女は、父や作品の思い出を静かに語ってくださいました。

それからと言うもの、父の作品を、また、作品を育てるにあたって培った演劇集団創造の想いを継承する為にはどうしたらいいのか。というテーマが私の頭を占領するようになりました。そして、ここに来るまで8年という時間がかかってしまったというわけです。ようやく状況が整った矢先、初代調教師ふうな男役を演じられた内間安男さんと、長田みちこさんの訃報が立て続けに届きました。その時、お二人への追悼の意も込めて今回のプロジェクトを始動させる決意をしたのです。この想いは私だけでなく、演出の上江洲先生、また、創造の皆さんも同じ気持ちでいてくれていると思います。皆さん、稽古に駆けつけてきてくれては、私や演出の上江洲先生、役者さんの相談に載ってください、小物やメイク、舞台スタッフとして、とてもとても助けてくださいました。稽古で新旧の役者さんが作品について話し合っている様は、とても嬉しかった。互いに尊重し支え合い、協力しあって、新しい「人類館」を創っている。私たちの最大のテーマ「継承」そのものだと思います。

さて、こうしてできた「人類館」ですが、この戯曲は、不思議なことに、様々な人に様々なテーマを与えてくれます。それは見る人によって、また見た時期によっても、全く違ってくるのです。だから、44年経った今でも、この戯曲が新鮮さを失わない理由ではないかと思います。今、喜劇「人類館」をみて、皆様は何を思うのでしょうか？ぜひ、「人類館」が投げかけるメッセージを受け取ってモヤモヤしてみましょ。答えはないのかもしれませんが。それでも見つめ続ける事、考えることを諦めなければ、きっといつか希望が生まれてくるのだと、私は信じています。

本来ならば、会場で一緒に楽しんでいただけるように準備を進めてまいりましたが、沖縄県の緊急事態宣言を受け、有客での公演を断念する決断をいたしました。楽しみにしてくださった皆様、メールやお電話で「残念です。いつかまた公演してくれませんか？」とおっしゃってくださったお客様には、本当に申し訳ない重いと同時に、心から感謝申し上げます。去った2月13日、14日に収録をいたしました所、配信スタッフが、「こんな機会はないと思うので、全て配信しましょう」と提案してくださいました。ゲネプロと本番と回を重ねるごとに、役者の演技が素晴らしくなっていく様がわかります。悩みながらも役や台本をなんとか理解して表現しようと全身全霊を使って努力している様が、幼少の頃にみた、父たち劇団創造の芝居作りを思い起こさせ、胸を熱くします。よろしければ、ぜひ、全ての喜劇「人類館」をご覧になってみてください。きっと皆様に、「生で見たい！」「会場で見たい！」と思ってもらえると確信しております。そして、いつかきっと、喜劇「人類館」を皆様と一緒に会場で共有できる日が来ることを願っております。

「人類館」の上演に向けて

演出 上江洲朝男

今回の「人類館」の上演に当たり、いくつかのマスコミの取材を受けた。演出を引き受けた理由を聞かれたときに、「戯曲は舞台上で演じられて初めて息づく。この作品は多くの若い人たちに自由に演じてもらいたい。そのために今回の舞台化を引き受けた」と答えた。

ちねん氏が創作したこの「人類館」を活字のまま書棚の隅に眠らせておくわけにはいかない。そう思っていた。役者が活字に息を吹き込み、声にして、動きにして、誰かの前に立ち現れることが大切なのだと。

私が初めて「人類館」の調教師役を演劇集団「創造」で演じさせてもらったのは、2003年の12月、大阪公演である。当時の私はこんなことを書いていた。

活字を生きた言葉にして舞台に乗せたい。だから私は演じるのだ。そうすれば、必ずや演じてみたいと思ってくれる若い役者が出てくるだろう。もう一度観てみたいと思う観客が声を上げるだろう。そのために私は演じてみようと思うのだ。そして、この戯曲がさまざまな人々の手によって演じられ、舞台化されることを期待したい。上演され続けて、多くの人がこの作品を味わってくればこんな嬉しい事はない。そして、その時々の人々が、自身を見つめ直し、普遍的なテーマについて考えてほしい。

自分のことながら、すでに十数年前にはこんなことを考えていたのかと驚かされた。そして、巡り巡って再びこの「人類館」に関わることになった。「活字を生きた言葉にして舞台に乗せたい。だから私は演出するのだ。そうすれば、必ずや演出を試みたいと思ってくれる若い演出家が出てくるだろう」ということだ。まさに、この作品のテーマの一つ「繰り返す」なのだ。

「人類館」の登場人物は3人。その3人が役や時空を目まぐるしく駆け回り、観る者を何度も突き放す。観客の皆さんには、振り落とされぬよう、心を開放して自在に時空を飛び回って、笑い、叫び、怒り、楽しんでほしい。思いっきり笑った後に、何かに気付いたり、感じたり、考えたり、観劇後のモヤモヤさえも楽しんでほしいと願う。

戯曲の舞台化の醍醐味は、個性的な役者をはじめ、舞台監督や音響、照明、音楽、小道具や衣装、踊りの振り付けなど多くの方々の力が響き合って、一つの作品となることにある。今回はリモートでの上演。残念ではある。が、しかし、いつか皆さんに再びお見せすることがあると信じている。その時は平面ではなく立体的な舞台をぜひご覧いただきたい。

結びに、これまで、この「人類館」を大事に舞台化してきた演劇集団「創造」の皆さん、遠くから、叱咤激励してくれている作者ちねんさんに心からのお礼を表したい。

登場人物



陳列された男

津波信一

沖縄で演劇に携わっている者なら一度は必ず目に、又は耳にした事があるであろう演劇人類館…岸田國土戯曲賞受賞作品である。今回光栄にも久々の再演に出演させて頂く事になった。稽古が進むにつれ難しさや楽しさが増していき、笑えば笑う程何故か悲しくなり、悲しくなればなる程笑い飛ばしたくなる不思議な魅力に取り憑かれていく自分がいた。光が強くなれば影は濃くなるように相反しているように見えるが実は表裏一体である。この人類館は逆に影に光を当てたような感覚を感じさせてくれた気がする。何を言っているのかわからなくなってきた。考えればかんがえる程答えが出て来ない。芝居と同じように振り出しに戻ってしま

まった。知念正真さんが演劇という手法で世に問いかけたこの人類館という設問の答えはそれぞれの心にあるのだろう。有難い事に今自分は確実に知念正真病になっている…

調教師ふうな男（ダブルキャスト☆）

島袋寛之

数年前、人類館の朗読劇を観劇したことがあります。人類館事件が本当にあったということに衝撃を受け、この戯曲を役者が実際に演じているのを観てみたいと思いました。実のところ、あの時は、内容を理解できず、人が動かないとわからない。と思ったのが大きな理由でした。今回、幸運にも人類館に関わらせてもらうことになり、うれしくて興奮しました。しかし、実際本読みをしてみると、セリフの多さにビビりました。さらに、時代背景や、その当時の沖縄人に対する差別や偏見など、僕にはイメージするのが難しく、方言もあり…なんと、読んでも内容が頭に入ってきませんでした。ということは…セリフが覚えられない。これは大変なことになった…どうしよう…。稽古を進めて

いく中で、演出の上江洲さんなどから台本の内容や、沖縄のことなど多くを教わり、自分でも調べものをする事でだんだんとイメージできるようになりました。本番では、台本のセリフの意味や独特の言い回しのリズムなど、この戯曲の楽しめる要素を僕と皆さんが実感することができるようになっている…はずです。その楽しめる要素が本当にそうになっているのか？！是非、映像で確認してみてください。





調教師ふうな男（ダブルキャスト★）

末吉功治

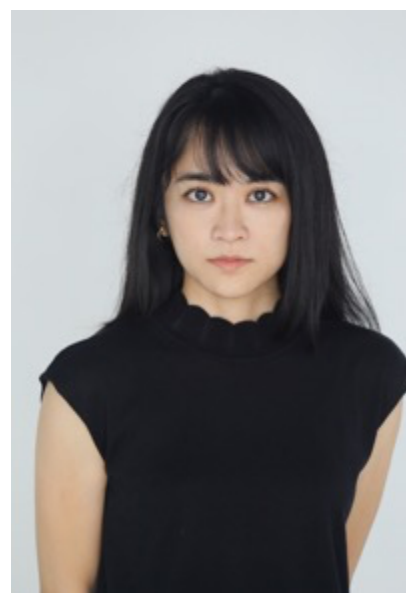
……………？？？

というのが、初めて台本を読み終えた後の率直な感想でした。読めば読むほど混乱し、上に上るほど下に下がるような不思議な感覚に悩まされました。現時点で僕の出来る解釈で、調教師という役を表現したつもりです。どうぞお楽しみください。

陳列された女（ダブルキャスト★）

上門みき

着ている服や物、言葉や時代が変わっても、人間は変わらない。苦しくても辛くても笑える強さを、逞しいなと思いました。たくさんの方のおかげで舞台に立つことができました。感謝いたします。



陳列された女（ダブルキャスト☆）

棚原 奏

今回の舞台に参加することがきっかけで「人類館」の事件のことを知りました。私なりに差別や女性の生き様や沖縄、日本の歴史に沢山触れることが出来たと思います。舞台の上でどんな化学反応が起きるのか楽しみです。この舞台が皆さんにとって笑って泣けてもやとする舞台になれば良いなと思います。

アカネの日記

幼少の頃、よく演劇集団創造の稽古場に連れられて行った。大人たちが稽古に励んでいる間、私らは稽古場の片隅に置かれ、それを見ていた。芝居の意味は分からないし、誰かに聞く雰囲気でもない。お酒を飲んだ時に見せる優しい陽気な大人たちが、全身全霊を使って芝居を作っている様は、小さな私の目にはそれはそれはカッコよく映って見えた。そして徐々に芝居が出来上がっていく空気を読むのが面白くて大好きだった。公演中、芝居を見てお客さんが笑う場面を見るのは特に好きで、決まった場所で必ず客を笑わせる父の作品や劇団創造を誇りに思い、とても尊敬していた。

昔から私に本を音読させては、感想や作者の意図を語らせるのが、父の晩酌の肴だった。今思えばその流れなのかもしれない。創造の稽古や公演を観た後は、芝居の感想や物語に対する理不尽さや不満を訴えることが多々あった。父は時折楽しそうに、時折面倒くさそうに聞いていた。（そう育てたのはあなただ。私のせいではない）何の話からそうなったのかは全く覚えていないのだが、私の話を聞いていた父が鼻でふんっと笑い「何を言っているんだ、人類館は喜劇だよ」と明言したのを鮮明に覚えている。その記憶が「人類館」は「喜劇人類館」だと、私の脳裏に焼き付いてしまったのだ。

今回、人類館を再演するにあたり、なんの迷いもなくタイトルに「喜劇」を付けたところ、演劇集団創造の団長に「今回、喜劇ってつけたんだね」と言われて愕然とした。慌てて過去の人類館公演の記録や父の記事を見返してみても、どこにも喜劇と書いていない。完全な私の思い込みだったのだ。その事実を知ってからは、「喜劇」を付けることに迷いが生じた。作者が考え、悩み抜いて付けた戯曲の名前を私の思い込みで勝手に変えていいものなのだろうか。

散々悩み続け、悩むことにも飽き始めたその時、ふと思った。私が喜劇と付けたことも喜劇にしまおう、と。そもそも人類館は沖縄の悲劇を喜劇的に見せた事で評価された戯曲である。初演のパンフレットには「悲劇は覚めた視点で相対化することによって喜劇たらしめることができる」と作者が明言している。そうだ。相対化だ。様々な解釈があっても良いではないか。喜劇をどういう意味で捉えるかは、芝居を見たお客様に判断してもらおう。この作品を見てくれた人の数だけ様々な解釈があれば、きっといつか、喜劇を超える素晴らしい未来が生まれるに違いない。

しめしめ良い言い訳ができた、とほくそ笑んでいたところ、脳裏を過る父の声。

「作者の伝えたい想いは言葉の裏にある。読みとる為には、声に出して100回読みなさい。」

幼少の頃から言われ続け、実践させられ続けてきた、呪いの言葉である。読むごとに作者が何を伝えたいのか、言葉の裏にある真意を感じながら読み進める。その内、頭だけではなく心で解る何かがある。と言うのが父の言い分である。戯曲「人類館」を知る為には…

そしてまた、新たな悩みが生まれる…

2020.12.08

那覇市内某中学校の一室、若い役者たちが演出の指示で、ときに戸惑いの表情を浮かべながらセリフと格闘し、そして動き廻る。喜劇「人類館」の稽古を覗いたのが1月も半ばを過ぎた頃だった。

「人類館」は、演劇集団創造の故知念正真の代表作で岸田戯曲賞受賞作品。我が演劇集団創造にとって最も上演回数を重ねた大切な作品で、東京、大阪でも好評を博した素晴らしい戯曲だ。今回、知念の娘あかねが立ち上げたAKNプロジェクトによって7年ぶりに甦った。しかも何と（陳列された女）と（調教師）はダブルキャストだ。上門みきと棚原奏の若い女優に、（陳列された男）役の津波信一率いるチームスポットジャンブルの島袋貴之に末吉功治。そして演出は、過去に（調教師）を演じた上江洲朝男が担う。顔ぶれをみてもワクワクさせられるメンバーが揃った。

ところで「人類館」は優れた戯曲ながら初演当時と比べて公演の頻度が少ないのが現状で、この作品に関わった誰もが、多くの人に観てもらいたいと口々に言う。確かに書かれている時代背景や事象は過去の出来事であり、作者も2003年に16年ぶりの公演の際「この作品は初演からかなりの年月がたち、自分と当時の観客との間にあった同時代を生きているという感覚を想定して書いただけに、今の世代と等しく共有できるのだろうかとの懸念があった」と、その微妙なズレみたいなものをかなり意識していたようだ。だが、いくつかの場面に手を加えてはいるが、久しぶりの公演は大成功で、それ以来、差別的な状況がある限り、この作品がもつ訴える力は色褪せることはないのだと私達も確信した。その時の公演パンフが手元にある。今舞台の演出家、上江洲朝男が調教師を演じるにあたって次のようなコメントを載せている。

「優れた戯曲でも活字のままでは本来の存在意義はみえてこない。上演されてこそ存在の意味が浮かび上がる。活字を、生きた言葉にして舞台に乗せたい。だから私は演じるのだ」「次代の若者が自由に演じられるように、休息していた人類館を掘り起こし、次につなげる意味で私は演じる。この戯曲がさまざまな人々の手によって舞台化されることを期待したい」と。

まさに本公演の意味がここに込められているのだ。無謀だと思ったダブルキャストも、いろんな人に体験させたいという思いもあったのだろう。

さて、今回の出来栄である。私も2003年以降の人類館で（陳列された男）を演じてきて、一筋縄でいかないこの作品と悪戦苦闘しただけに、稽古の進捗状況をみて、正直「ちょっと心配だね」と演出家に耳打ちしたのが本当のところであった。だが、本番は見事に演じてくれた。俳優たちは目まぐるしく場面を変転させながら展開する舞台を、各々のキャラクターを活かして喜怒哀楽を表現していた。さすがエンタメ界で活躍しているだけあって、最後は帳尻を合わせて来やがった(笑) いや、ちょっと褒め過ぎた。これがスタートでまだまだ面白くなるはずだ。

残念ながらコロナ禍の影響でウェブ配信となったが、生の収録舞台を観たものとして、是非、観客を入れた公演を期待したい。

花城清長 （演劇集団創造）

スタッフ

作	知念 正真
演出	上江洲 朝男
演出助手	仲嶺雄作
舞台監督	猪股孝之
音楽	新垣 雄
音響	富眞 彰
照明	棚原栄作・松岡さとみ・新里愛・（STAGE OFFICE LUCE）
制作	知念あかね・キムウネ
広報	森田さくら・山田幸乃・山田優樹
ホームページ	長濱良起
デザイン	KOOTA
映像カメラ	島袋弘康
スイッチャー	島袋孝道
Special Thanks	花城清長・今 郁義・田場裕規・山田光夫・土屋幸司・城北中学校・EISO
大道具	饒平名成汰郎・仲田有希
メイク	今 秀子
小道具	西藏盛史子
ケイタリング	宮城菜那
後援	西原町、西原町教育委員会
支援	沖縄県、公益財団法人沖縄県文化振興会
主催	AKNプロジェクト